

中国唐代における「園林」文学研究 —絶句連作詩を中心にみる景物描写について—

二宮 美那子
京都大学文学研究科 非常勤講師

はじめに

本研究では、中国唐代における園林（庭園、及び庭園を併設した私的居住空間を指す）文学を考察する一環として、園林の景物を詠む絶句連作詩を取り上げる。唐代には、庭園など特定の空間に配された景物を詩題として絶句を詠み、連作に仕立てる作品群が見られる。連作の舞台となるのは個人所有の庭園、或いは風光明媚な景勝地などであり、個々の作品で取り上げられるのは、地名・建築物、風景、園内に生息する生き物、収集された石や植物など多岐に渉る。庭園や景勝地に鑑賞のポイントを設定し、名前を付けて区切っていくという行為は、現存する宋代以降の園林にも通じるものであり、ごく文化的な庭園・景勝地の楽しみ方とすることができる。庭園を取り上げた絶句連作詩は、唐代に発展した絶句という詩形、或いは叙景詩の展開と言った中国詩史上の問題のみならず、園林史にも関わる広がりを持つと言える。

今回取り上げる絶句連作という形式では（律詩や古詩で類似する連作も存在するが、今回は考察の対照としない）、詩人はごくわずかな文字数で各々の景物に対する観察眼を発揮せねばならない。このような作品において、詩のテーマ（詩題）として何を取り上げるか、また景物のどのような面が切り取られているかを考察し、当時の景物或いは園林への対し方や、園林美学のあり方を探ることが、本研究の目的である。その初歩的な試みとして、まずはこの形式の実質上の嚆矢と言って良い盛唐・王維（?-761?）の五言絶句連作「輞川集」と、輞川集にごく似た形式をもつことが指摘される中唐・韓愈（768-824）「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」を比較し、これらの連作詩が持つ特色を検討してみたい。

考 察

1. 王維「輞川集」について

五言絶句二十首からなる王維「輞川集」は、山水詩人としての王維の評価を確立した、名実共に彼の代表作と

呼ぶに相応しい作品である。舞台となった輞川荘は、長安にほど近い藍田県にあり、王維はそこで半官半隱の生活を送りながら多くの優れた叙景詩を作った。作品は、輞川荘の点景を五言絶句に詠み、それらを連ねて輞川荘と言う空間の布置をも示している。文学のみならず、音楽や絵画にも突出した才能があったとされる王維には、他に「輞川図」と言う絵画作品があったことが知られている。絵画は失われたものの、後人による模写が遺されており、輞川の全容を視角イメージによって今に伝えている。連作には、孟城坳、華子岡、文杏館、斤竹嶺、鹿柴、木蘭柴、茱萸泚、宮槐陌、臨湖亭、南垞、欽湖、柳浪、欒家灘、金屑泉、白石灘、北垞、竹里館、辛夷塢、漆園、椒園の二十箇所の景点が取り上げられ、また王維の無二の詩友であった裴迪の、同じく五言絶句による唱和詩が添えられている。

この輞川集は、その完成度によって中国山水詩史に重要な位置を占めるのみならず、五言絶句という詩体の芸術性を高めた点において、その意義は大きいとされる。『唐詩選』にも採録される人口に膾炙した作品を二首挙げると、

鹿柴

空山不見人	空山 人を見ず
但聞人語響	但だ聞く 人語の響くを
返景入深林	返景 深林に入り
復照青苔上	復た 青苔の上を照らす

辛夷塢

木末芙蓉花	木末の芙蓉花
山中發紅萼	山中 紅萼を發す
澗戸寂無人	澗戸 寂として人無し
紛紛開且落	紛紛として開き且つ落つ

「鹿柴」では詩の中の主体が捉えた声の反響と光線を描くことで、空山という空間が大きな広がりを見せる。「辛

夷塙」の人知れず咲きまた散る華麗な花の描写は、動的・刹那的でありながら同時に古代の悠久の時の流れを感じさせるかのようなのである。引用は連作中のごく一部に過ぎないが、いずれも静謐、清澄、絵画的などと評される王維詩の特色をよく伝えるものと言えるだろう。

2. 機知を競う絶句連作

—韓愈「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」

元和八年（813）の作とされるこの作品は、虢州（現河南省洛陽の西）刺史であった劉伯芻の官宅の一角を占める庭園、三堂を題材に作った五言絶句の連作である。序文には、まず劉伯芻自身が作った作品があり、多くの文士がそれに唱和したとされるが、現在、韓愈以外の詩人の作品は残っていない。連作で取り上げられる景物は、新亭、流水、竹洞、月臺、渚亭、竹溪、花島、柳溪、西山、竹逕、荷池、稻畦、柳巷、花源、北樓、鏡潭、孤嶼、方橋、梯橋、月池の二十一カ所。「輞川集」と比べて名称がいずれもシンプルなのは、庭園の設計段階では、各景物に名称が付けられていなかったためかもしれない。今連作の中から二首引用すると、

花島

蜂蝶去紛紛	蜂蝶 去ること紛紛たり
香風隔岸聞	香風 岸を隔てて聞こゆ
欲知花島處	花島の處を知らんと欲せば
水上覓紅雲	水上 紅雲を ^{もと} 覓めよ

孤嶼

朝遊孤嶼南	朝に孤嶼の南に遊び
暮戲孤嶼北	暮に孤嶼の北に戯る
所以孤嶼鳥	所以に孤嶼の鳥
與公盡相識	公と盡く相い識る

「花島」は庭園の池にある花盛りの島。後半の「花島の場所を知りたいなら、水上に浮かぶ紅の雲を探しなさい」という機知が、詩の眼目となっている。「孤嶼」は有名な古楽府「魚は蓮葉の南に戯れ、魚は蓮葉の北に戯る」（『樂府詩集』巻26・唱和歌辭）という一節をもじって歌謡的な趣を出しつつ、鳥と親しむ公の姿を捉える。この連作の特徴は、五言絶句という限られた文字数で、取り上げた題材をいかに気の利いた言葉で表現するか、という遊戯的な構えにあると言ってよい。景物の美しさを描写すると言うよりは、その形態や連想されるイメージから導き出される、謎かけ問答のようなやりとりを楽しむ

むことに重点がおかれているのである。流水・竹洞・月臺・西山・鏡潭・竹逕・荷池・方橋・梯橋などが、そのような例として挙げられる。

3. 二作品の比較

ここまで二作品の簡単な紹介をしてきた。景色を区切って楽しむ庭園鑑賞法は、当時ある程度確立していたと考えられるが、二作品の形式の類似には、それ以上の影響関係を想定して良いようである。韓愈自身は序文で王維の連作に一切言及していないものの、錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』が清朝の朱彝尊の「首首新意を出し、王・裴の輞川諸絶と頗る相い似たり、音調却って彼の高雅なるに及ばず」を引用するように、二作品の形式が類似することは、後世からも指摘されている。しかし、このように形式面での類似性が指摘される一方で、二作品には大きな差異が幾つか認められることにも注意せねばならない。

まずは、外的要素として作品創作の場やその性質が異なること。「輞川集」は自分の所有する莊園を題材とし、裴迪と二人だけの唱和という、第一義的には「閉ざされた」関係の中で作品創作をしている。対する韓愈は、友人である劉伯芻が拡張・改修を加えた庭園（三堂）を、大勢の文士に追随する形で詠っている。誰に向かって、どのような場で作られたかと言うことは、当然ながら詩の表現や内容に大きな影響を及ぼす。中国古典詩はそもそも社交の道具としての面を強くもつものであるし、それ自体社交の場である庭園を取り上げた作品となると、それが一層顕著になるのも自明のことであろう。

それらの違いは、両作品の「視点」の違いに明らかに反映されている。王維の作品では作中人物の動きに合わせて風景が語られ、また「自分の空間を語る」という視点が保たれている。更に、「夫君」とのみ称される、素性の明らかでない人物を送っていく場面（「歛湖」）などには、敢えて事物の固有性を排除する意図すら読みとれそうである。一方、韓愈詩で登場するのは、先に引用した「孤嶼」に明らかのように、詩を捧げる相手である劉伯芻その人であって、当然のことながらその表現には社交上の措辞が含まれることになる（鳥と親しむと言うのも、鷗と親しむ翁という『列子』黄帝篇の故事が想起され、公の徳を称賛しているようにも取れる）。韓愈が仮に王維の作品を意識していたとしても、このような創作の場の違い、そしてそこから生まれる表現の手触りの違いには十分に注意する必要がある。

更にもう一点、二つの連作には内容に関わる大きな違いがある。それは、王維の連作の中には、詩題と内容とに具体的な繋がりが見られないものがあるのに対し、韓愈作品ではまず題材ありき、と言う態度で作品を作っていることである。一見単純な違いのように見えるかもしれないが、これは作品が重視するものの違いに繋がる、重要なものだと言って良い。例えば引用した王維の「鹿柴」、これは山中で鹿を飼っている場所を指すが、王維はそのような場所が本来もつ意味とは全く関わりなく、美しく静謐な山の風景を描く。つまり、詩題と実際に描かれる風景とには、一種の恐らく意図的な乖離がある。一方引用した韓愈「花鳥」詩では、花鳥の様子を雲に喩える機知が詩の眼目になっており、それは花鳥という場所、その姿形が有ってこそ導き出されるものなのであって、詩題と内容は密接に結び付いている。また、輞川集には連作全体に統一された空間としての構想が見られるのに対し、韓愈はあくまで目の前にある景物に集中し、それらを機知によって捉えることに工夫を凝らしており、作品を連ねることで大きな空間を描き出そうとする意図は薄い。これらの態度の違いは、作品の性格に決定的な作用を及ぼしていると考えられる。影響関係が指摘される二つの作品だが、景物への対し方が明らかに異なっているのである。

終わりに

二つの作品を例に挙げて、風景の取り上げ方の差異を論じた。このテーマを巡っては、まだ様々な問題が残されている。まず根本的なものとして、上述の王維と韓愈

の違いを、「変遷」と捉えるか、或いはそれぞれをある程度孤立した「個性」と捉えるか。もとより、王維が生み出した五言絶句芸術は突出した個性と言わねばなるまいが、それは続く時代にどのような影響を与えたのか。また、二者の違いを「変遷」と捉えるならば、両者の差異は、盛唐から中唐にかけての風景認識の変化を表してはいないか。

これらの残された問題を考えるためには、唐代のその他の景物連作詩を考察する必要がある。現在、①ある特定の、区切られた場所をテーマにすること、②絶句であること、③各々の作品に個別のタイトルが付けられていること、を基準に、唐代の他の作品の調査・収集を引き続き行っている。これらの作品を精査し、王維から韓愈に至る風景連作詩や、絶句作品の流れを把握した上で、改めてこれらの問題に取り組みたいと考えている。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、財団法人三島海雲記念財団による研究助成を賜りました。同財団関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 陳鉄民：王維集校注（一～四冊、中国古典文学基本叢書）、pp. 413-429、中華書局、1997。
- 2) 錢仲聯：韓昌黎詩繫年集釈（上・下、中国古典文学叢書）、pp. 888-899、上海古籍出版社、1994。
- 3) 入谷仙介：王維研究（東洋学叢書）、創文社、1976。
- 4) 錢志熙著・土谷彰男訳：中唐文学会報、14、pp. 29-50、2007。
- 5) 紺野達也：日本中国学会報、61、pp. 59-73、2009。